



Title	認知文法における主観性構図の検討
Author(s)	野村, 益寛
Citation	Conference Handbook, 29, 229-234
Issue Date	2011
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/51154">http://hdl.handle.net/2115/51154</a>
Type	proceedings (author version)
File Information	nomura2011.pdf



[Instructions for use](#)

## 認知文法における主観性構図の検討

### (A Critical Assessment of Langacker's Notion of Subjectivity)

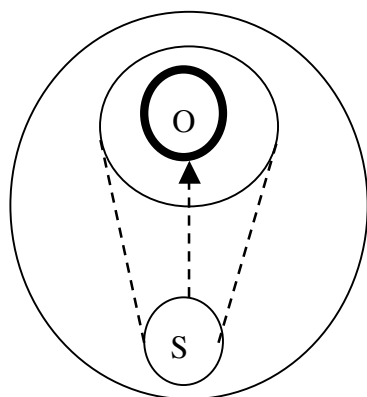
野村益寛 (NOMURA, Masuhiro)

北海道大学 (Hokkaido University)

本発表は、ラネカーの認知文法における主観性構図を批判的に検討し、その問題点を指摘した上、修正案の提示を試みることを目的とする。第1節では、最初に主題的に主観性が論じられた Langacker (1985)を中心に、認知文法の主観性構図を紹介する。第2節では、池上 (2000)のいう「主観的把握」についてのラネカーの分析がどのように変遷したかを辿り、第3節では、その変遷の原因を考える。第4節では、認知文法の枠組みの中で「主観的把握」を捉えるにはどのような修正が必要かを考える。第5節では、今後の課題についてふれる。

#### 1. 認知文法における主観性: Langacker (1985)

ラネカーの認識(conception)に関する基本的構図は、Langacker (1985)以来変わっていない。最近の Langacker (2008:260)では次のように示されている。



S=認識主体=Ground

O=認識客体=profile

大円=意識の及ぶ範囲=MS

楕円=オン・ステージ領域=IS

---> = 注意

オフ・ステージにいる認識主体(S)は、オン・ステージ領域に注意を向け、その領域の中から認識対象(O)を注意の焦点として選び出す。認識主体に自己意識や自分が対象を観察しているという意識がなく、認識対象が周囲や認識主体から明瞭に区別されているとき、主体/客体の非対称性は最大となる。このとき、認識主体は最大限に「主体として把握」され、認識対象は最大限に「客体として把握」される。

elbow, antelope, desk のような非直示的な語の意味とは、話し手は把握関係を結ぶにすぎず、最大限主体として把握される。以下でみるように、話し手がオン・ステージとの関与を深めるにつれ、主体/客体の非対称性が弱まり、話し手が主体として把握される

度合い—以下これを「主観性」と呼ぶ—が減少する。

まず、tomorrowのような直示表現の意味には、発話時が基準として関与するため、話し手とのつながりが生じ、その分だけ話し手の主観性が減少する。だが、この段階ではまだ話し手はオフ・ステージにいる。(Langacker (2008:262)では、commieのような話し手の態度を含む語なども話し手がオン・ステージと関与する場合として挙げられている。ここにおいて、ラネカーと Traugott の主観性が接点をもつことになる。)

これに対して、話し手がオン・ステージに乗ると、話し手の主観性はいっそう減少する。次の例をみてみよう。

- (1) a. Don't lie to me!  
b. Don't lie to your mother! (Langacker 1985:127)

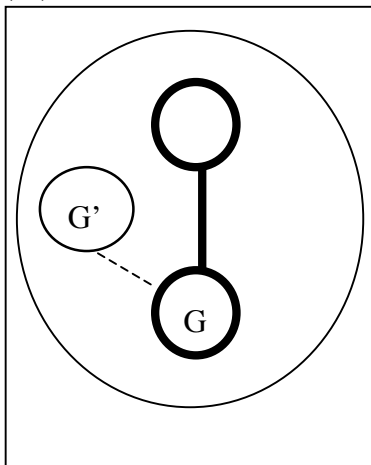
(1a)、(1b)において、話し手はそれぞれ me と your mother という形で言語化され、オン・ステージに乗る。(1b)では、自己分裂 (displacement)が生じていて、オン・ステージ上の自己を、オフ・ステージにいる他者(自分の子供)の目を借りたもう一人の自己が眺めていることになる。これにより、自己は客体となり、話し手の主観性は最小となる。

では、(1a)はどう分析すればよいだろうか？ラネカーは次のペアを基に考察を進める。

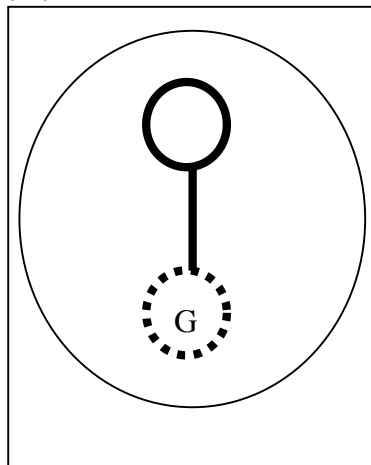
- (2) a. Ed Klima is sitting across the table from me!  
b. Ed Klima is sitting across the table! (Langacker 1985:140)

(2a)はクリマと話し手の位置関係を客観的に描写しているにすぎないのに対して、(2b)は同じ状況を話し手の目に映るがまま (seen "through the eyes of" the speaker)描写しているという意味的違いがある。(2a)、(2b)はそれぞれ下の(3a)、(3b)として図示される(Langacker 1985:143)。

(3a)



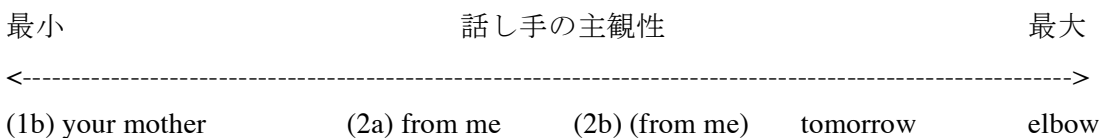
(3b)



話し手が自分に見えるままを描写する(2b)では、自己は分裂せずに(3b)のように表され

る。自己が客体にはなりきらず主体性を保持していることが、G の点線によって示されている。一方、(2a)では自己分裂が生じ、(3a)のように表される。話し手は実際の位置 G から踏み出て自己を外から眺めることができる位置 G' を占める。(2a)では自己は認識の客体となっているのに対し、(2b)では自己はオン・ステージにあるものの、認識の主体性を保持している点で、話し手の主観性が高いと言える。( (1b)の自己分裂と(2a)の自己分裂では、自己をオフ・ステージから眺めるか、オン・ステージから眺めるかの点で異なり、前者(過激型)の方が後者(穏当型)より客観性が高いとされる。)

以上、話し手の主観性の尺度をまとめると次のようになる。



(2b)にみられる事態把握の仕方を池上 (2000:285)は「主観的把握」と呼び、「ある状況を言語化する際に、話し手が言語化の対象とする状況の中に身を置くという形で視点を設定し、自らを認識の原点として言語化のための状況把握を行なう」と特徴づけている。一方、「主観的把握」をめぐるラネカーの分析は、これ以降紆余曲折を経ることになる。

## 2. Langacker (1985)以降の変遷

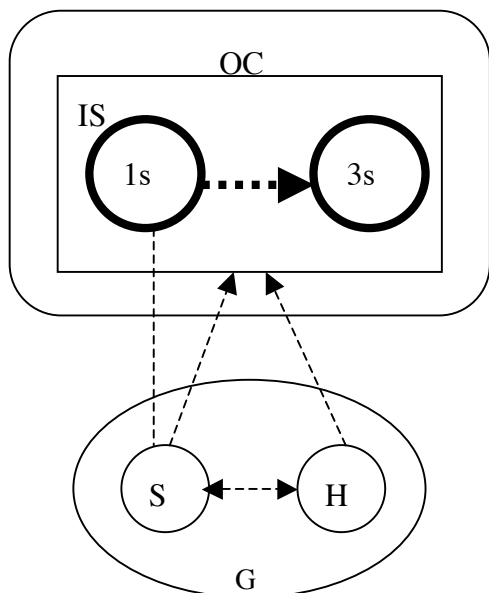
まず、Langacker (1987:131)では、Langacker (1985:115)でも取り上げられた *There is a mailbox across the street.* に関して、話し手が非明示的な参照点として働き、明示的な場合よりも客観性が落ちる(=主観性が増す)と述べられる。Langacker (1985)と違うのは、この非明示的な話し手がオフ・ステージにいるとされる点である。次に、Langacker (1990:21)では、おなじみの *Vanessa is sitting across the table.* を基に、話し手は「オン・ステージの縁か、たぶんオフ・ステージ」にいるとされ、Langacker (1985)と Langacker (1987)を折衷したような提案がなされている。

最近の Langacker (2008:468)では、(4a,b)の違いを(5a,b)として示している。

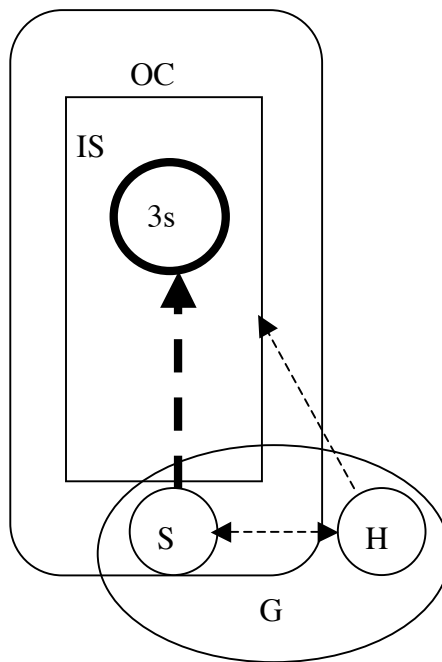
- (4)     a.        I don't trust him.  
           b.        (I) don't trust him.

まず、(4a)についてみると、自己分裂を含むと分析する点では、Langacker (1985)と同じだが、自己を眺めるもう一人の自己がオン・ステージでなく、オフ・ステージに位置する点で異なる。

(5a)



(5b)



他方、(4b)については、明示化されない話し手は、オン・ステージ (IS)とオフ・ステージの間に設けられた Objective Content (OC)という領域に位置するとされている。これは、Langacker (1990)における「オン・ステージの縁か、たぶんオフ・ステージ」にほぼ相当するものと考えられるが、オン・ステージ上の要素が「認識の対象」であり、OCが「描写の対象」(Langacker 2008:462)であることを考え合わせると、非明示の1人称は認識の対象ではないが、描写の対象であるという不可解なことになってしまう。

1人称明示型と1人称非明示型の主体の位置に関するラネカーの考えの変遷をまとめると次のようになる。

	1985	1987	1990	2008
1人称明示型	onstage	言及なし	onstage	offstage
1人称非明示型	onstage	offstage	the fringes of the OS-region or perhaps offstage	OC

### 3. 迷走の原因

池上が「主観的把握」として明快に説明した現象の分析に、ラネカーはなぜかくも苦心せざるを得ないのだろうか？ Langacker (1985)でオン・ステージ上にあるとされた1人称非明示型の主体を、ラネカーがそれ以降オン・ステージから放逐した理由には、プロ

ファイルをめぐる2つの問題があると考えられる。

第1がプロフィールとオン・ステージの関係の問題である。プロフィールは“the entity that an expression designates” (Langacker 1991:551)と定義されるもので、言語化にかかわる問題であるのに対し、オン・ステージは“the primary locus of attention in a viewing situation” (Langacker 1985:122)と定義される認識の問題である。この両者の関係については“the profile is restricted to the objective scene” (Langacker 1985:142; cf.135)と述べられているが、これをどう理解すればよいだろうか？両者の関係を2つに分けてみよう。

(6a) ある要素がプロフィールされているのならば、それはオン・ステージ上にある。

(6b) ある要素がオン・ステージ上にあるならば、それはプロフィールされている。

言語表現が指示するものは、注意を向けない限り理解できないので、(6a)が成り立つことには異論なかろう。問題は(6b)である。注意を向ける場にあるものは、言語化されている必要があるだろうか？おそらくないであろう。ところが、ラネカーは(6b)も成り立つと考えたのかもしれない。もし、(6b)が成り立つと考えるなら、1人称非明示型の文において話し手をオン・ステージに乗せると、言語化されていないものがプロフィールされるという矛盾をきたしてしまう。それを避けるために、Langacker (1985)以降、1人称非明示型の文の主体がオン・ステージから下ろされたのだと考えられる。

第2がプロフィールと概念的自律／依存性の問題である。認知文法では、関係がプロフィールされる時、関係を結ぶモノがプロフィールされないのは、関係はモノに概念的に依存するという前提に反するため、許容されない。このことも、プロフィールされない1人称非明示型の文の主体をオン・ステージに乗せることをラネカーがためらった原因の1つであろう。

こうした理論内の齟齬と、話し手の現場での見えを表わしたのが(2b)であるという意味的直感との板挟みにラネカーは陥ったものと推測される。

#### 4. 修正案

それでは、この板挟みから抜け出すことは可能だろうか？前節の2つの問題のうち、第1の問題の解決は簡単で、(6b)を採らなければいいだけである。第2の問題はこう考えることができるかもしれない。関係がモノに概念的に依存するというのは認識の問題であるのに対し、プロフィールされるかどうかは言語化の問題である。関係がプロフィールされる時にモノもプロフィールされなければならないというのは、この2つのレベルの混同であるように思われる（英語では、述語は項抜きには実現しないので、この2つのレベルは一致するが、述語だけで文が成立する日本語のような言語では一致しない）。そこで、モノがプロフィールされなくても、関係をプロフィールできると考えると、(3b)

において G がプロファイルされないような図式が許容され、G をオフ・ステージに追いやったり、OC という領域をわざわざ設ける必要もなくなる。こうして、池上の「主観的把握」を認知文法の枠組みでシンプルに表現することが可能となる。(ただし、モノがプロファイルされなくとも関係をプロファイルできるとする変更は、グラウンディング論を始め、既存の分析にどう影響が及ぶか慎重に見極める必要がある。)

最後に、主観性を考える上で認知文法に欠けていると思われるのが、物語論では G. Genette 以来なされてきた語り手(narrator)と観察者(focalizer)の峻別である。これは認知文法の Ground に融合している概念化者(C)と話し手(S)の区別を意味する。実はこの区別は、例えば(1b)において、話し手はこの文を発する語り手と、聞き手の観点に立つ観察者に自己分裂するいうときにラネカーも暗黙のうちに必要としたものである。1人称非明示型の文について「見えたままを表現する」と言われることがあるが、語り手＝観察者は(2b)のような文においてのみ成り立つ。(2b)を過去形にすると、語り手は現在の自分だが、観察者は過去の自分(例えば、子どものときの自分)となり、両者は分離する。

Langacker (1985:140)は “Dmitri was trudging through the woods. There was a clearing ahead.”という物語的文章を取り上げ、作者は Dmitri の視点を採用していると分析しているが、ここでも語り手＝作者、観察者＝ Dmitri というように2つは区別される。一般に、日本語は語り手と観察者の分離を、英語は語り手と観察者の一致を好むと言えるかもしれない。ジョン・ベスター訳『ベスト・オブ宮沢賢治短篇集』から例を2つ挙げよう。

(7) その草地のまん中に、せいの低いおかしな形の男が、膝を曲げて手に革鞭をもつて、だまってこっちをみていたのです。一郎はだんだんそばへ行って、びっくりして立ちどまってしまいました。There, in the middle of the meadow, a most odd-looking little man was watching Ichiro. [...] (p.29)

(8) おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉がこっちをのぞいています。[...] ふたりは泣き出しました。What was worse, two blue eyeballs were ogling them through the keyhole. [...] And they both burst into tears. (p.59)

## 5. 今後の課題

(9) What a glorious day! The sun is shining, the sky is blue, and the scenery is spectacular. There's snow all around Ø, as far I can see, and no smog at all. I feel great! ØWish you were here. (Langacker 1985:139)

1人称明示／非明示型の相違が事態把握の違いを表わしているなら、このような短い文章でも事態把握の仕方がくるくる変わることになるが、それでいいのだろうか？1人称が主語に現われる場合とその他で現われる場合とを一括りにしてよいのだろうか？